

雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉



冬

小林貴子

霜枯をうねりて遠賀川海へ
魚棲まぬ秋湖や岩の赤々と
紅葉かつ散るぽくぽくと蹄音
黄落や蹄が深く砂ゑぐり
日の当る既に新葉ほぐしをり
立追悼 五句冬や幹の向うへ君隠れ
通夜の夜天王星の蝕が起き
悼むには高すぎる空広き空
亡き人の顔へふはりと冬の絹
むささびや心ぽかんとしたるまま